



挑み続ける現場から 命の重さのメッセージ。



ミレニアム40号
発行記念特集

のぐちけん 野口 健

登山家
アルピニスト

野口健さんといえば、軽妙なトークで親しまれる、明るく愉快なアルピニスト。
それを表面とするなら、裏面の野口さんは、エベレストや富士山の清掃登山の他、※シエルバの遺族の支援や旧日本兵の遺骨収集など、多様な問題に取り組み、過酷な現場で活動し続けています。

本誌「ミレニアム」は今号で12年目の40号。その記念特集として、幾つものテーマを背負いながら登り続ける『生きる強さ』を持つ野口健さんから、「命」そして「生きること」について、同時代を生きる私たちに伝えたいことを語っていただきました。

物事の裏に隠れた、
大事なテーマを見逃すな

私の父は、外交官としてイエメンに赴任していたことがあります。当時、高校生の私が遊びに行くたび、親父はイエメン中、視察の旅に連れ回しました。観光地の裏には治安が悪いスラム街があり、街に唯一の病院に行くと、大やけどしている子どもがいれば、血を流しながら死んでいる人もいます。それはもう悲惨で、ショッキングな光景でした。

その時に親父がよく言っていたのは、世の中にはA面(表)とB面(裏)があるということです。観光地はA面で、多くの人はA面しか見ないけれど、得てして大事なテーマはB面にあるもの。だから、おまえもそこを良く見ろと。それは今も、私のモノの見方や考え方



けました。それがきっかけで、がむしゃらに山に登り始め、私の人生は大きく変わっていききました。

世界で初めて、世界一の山で 世界一過酷な清掃活動開始

※ヒマラヤに登るようになると、エベレストにもA面とB面があることに気づかされました。外国人が登頂に成功し功績が称えられるのがA面。しかしその陰で、同行した地元のシェルパが毎年亡くなっているというB面は表に出てこない。しかも、テレビや本で見たエベレストは神秘的で美しいばかりでしたが、実際はやたらゴミが多くて汚かったんです。

そしてある時、ヨーロッパのある登山家から「おまえら日本人は経済は一流だけど、マナーは三流。日本人は、ヒマラヤをマウント・フジにするつもりか!」と言われ、衝撃を受けました。

の基本となっています。
山と出会ったのは、完全に落ちこぼれていた高校時代です。

少年時代の私はひどくやんちゃで、高校時代は喧嘩に明け暮れた挙句、先輩をぶん殴って停学処分。その時、親父から薦められて一人旅に出て、そこで偶然手にしたのが、故・植村直己さんの著書『青春を山に賭けて』でした。

自分と同じように落ちこぼれ少年だった植村さんが、失敗しながら冒険の夢を実現していく姿にひきつけられ、この本にはとても影響を受

どういう意味か尋ねると「富士山は、世界で最も汚い山だから」と言われ、さらにシヨック。当時、海外の登山家達の間で「富士山はゴミだらけで汚い」と有名になってしまっていたんです。

正直、むちゃくちゃ腹が立ちましたが、目の前に日本語が書かれたゴミが散乱していたので、反論できません。

そこで「だったら、俺がゴミを拾って綺麗にしてやる!」と始めたのがエベレストの清掃登山です。悔しくて見返したい一心で始めた清掃活動でしたが、そこはエベレスト。高山病で頭痛や吐き気に苦しみながら氷河を砕い

てゴミを回収するとい
う、命がけの過酷な作
業です。

その後すぐ、富士山の清掃活動も始めましたが、当時の樹海はレベルの違う汚さ。廃材、家電製品など不法投棄されたゴミだらけ。日本のシンボルである富士山の惨状を知ってしまった以上、日本人として引き下がれませんでした。

清掃登山を始めて11年が経ち、エベレストでは、新しく捨てられたゴミが見つかることはほなくなりました。富士山の方も清掃活動への参加者が年々増え、今ではだいぶ綺麗になっています。

死を間近に感じるほど、 生への執着が強まった

高所は酸素が薄いんですが、これが大変体に悪く、血液がドロドロになってしまします。血行障害に極度の脱水状態。栄養失調の上常に緊張しているため非常にストレスがたまる。しばらくヒマラヤに行ったあとは体調が悪く、病院に行くと血液検査でみんなひっか



かつてしまいます。

よく「無理をしないで」とご心配いただきませんが、ヒマラヤは無理をしないで行けるような所ではないんですね。

エベレストでは、死は極めて身近。いたる所で、放置された遺体を目にしながら登っていきます。時に、目の前であつという間に人が死に、仲間が亡くなつても連れ帰ることさえできない場合もあります。

15歳で登山を始めた頃の私は、山に命を賭けるという行為にロマンを感じ、死を美化していました。しかし、本当の死は生々しく残酷。滑落した仲間の死と向き合うと、イメージしていた死と現実とのギャップが、とてつもなく大きい。そして、目をそむけたくなくなるほど変わり果てた遺体に、母親がほおずりする姿を見て、人が死ぬことの残酷さを容赦なく、思い知らされました。

そうやってリアル

な死を突きつけられ、死の恐怖に怯えるほど、「死んで

たまるか！ 何が何でも生きて日本に帰りたい！」と、生への執着が凄まじく強烈になつていくんです。

私は今、旧日本兵の遺骨収集活動を行つてい



区域に入り、ある牧場を訪れたんですが、そこはまさに地獄でした。ほとんどの家畜が餓死している中、腐敗した仲間の肉を食べて生き延びているブタもいました。

その悲惨な光景を撮影したものの、写真を公開するか否かについては、かなり悩みました。一番苦しんでいる被災地の方々を、より追い詰めてしまいかねませんから。でも、文字情報だけでは現場の危機は伝わらないと考え、結局私は、自分のブログに掲載しました。

被災地に足を運んでも、家があり家族も元氣な私が、被災者の気持ちを自分のこととして理解するのは無理です。でも、現場の状況をもう少しダイレクトに知ること、苦しんでいる方達の思いに近づくことはできると思うんです。

もちろん、被災者への配慮は、とても大事なことです。しかし、命や日常のかけがえなさを感じ、起きている問題にみんな向き合うためには、時として、現実をリアルに伝える責任があると思います。

自然体験の中で育つ、 自力で生き抜く生命力

今、日本各地で小・大学生を対象に、環境教育を行う「野口健康環境学校」というものを主催しています。

数年前、小笠原諸島で小学生にカヌーの乗り方を教えていた時のことですが、カヌーは

20キロ圏内で感じた、 現場の危機を伝える責任

先進国で生きていると、人の死に遭遇することは滅多に無いですよ。だから、死のリアリティがなかなか感じられない。たとえば東日本大震災の時も、日本のメディアは遺体の写真は出さないので、現場のリアリティはなかなか伝わりません。

昨年7月、私は福島原発20キロ圏内の警戒

ひっくり返ったら自然には元に戻ってくれないため、まず脱出の方法から教えていました。事前に教えたとおり10人くらいの子が一斉にわざとひっくり返ると、半数の子は自力で脱出しましたが、あと半数が出てこないんです。あわてて飛び込んで中を見ると、ひっくり返ってパドル（船のオール）を持ったまま、目をつぶってじっとしている。そのままでは死んでしまうのに、もがきすらせずフリーズしているんですよ。

これはどういうことかという、自然体験の無さなんですね。たとえば、木登りをして



いたら降りられなくなり、子どもながらに生命のピンチを感じてドキドキしながら必死に降りる。そういう経験が全く無く、常に親や学校から守られているため、いざ何かあった時に自分で対処できない。要は、生命力が育っていないんです。

ところが、自然の中で自分の目で見て肌でふれ、驚いたり、怖かったり、嬉しかったりを重ねていくと、3日目くらいから子どもは生き生きと変わりました。

環境学校では、その日の活動をレポートに書かせたりスピーチをさせたりしています。最初のうちは、みんなネットで調べたような似たりよったりのことばかり書くから、どれも印象に残りません。それが色々な体験を積み重ねるにつれ、自分なりの生きた言葉で語るようになってきます。そうなると人の心に伝わるメッセージを表現できるようになり、それが非常に大事なんです。

助け合うつながりが、
人と社会を変えていく

富士山での環境学校の際、非常に印象に残る女の子がいました。まわりの同級生としゃ



べろうとしないので、なぜなのかに聞いてみると「私は勉強ができるから」と、質問の答えになってないことを言っただけです。

そしていざ富士山に登ると、高山病で誰もが苦しい中、子ども同士が自然と励まし合い、彼女も助けられながらようやく登頂できました。

すると、それまでは友達なんかいないって感じだったその子が「あの時、みんなが声をかけてくれなかったら登れなかった。やっぱり、友達ってすごく大事だったわかった気がする」と言ってくれたんです。山や自然が相手だと人間は一人じゃ何もできないことを痛感させられるんですね。

僕自身も、昨年春のエベレスト清掃登山の際に大きな雪崩に遭い、「もうダメか」と思ったことがありました。でも、その時もメンバーがひとかたまりになり、励ましてもらったことで無事に生還できました。

当たり前のことのようにですが、生きるために人と人とのつながり、助け合う。それによって社会が変わっていく。人が生きていくベールは、そこにあるのだと思います。

読者プレゼント

抽選で
5名様

・サイン色紙
・サイン入書籍

詳細は、医師会
インフォメーション
をご覧ください。

※「ヒマラヤ」：インド・ネパール・ブータン・パキスタンと中国の国境地帯にある世界最高の大山脈。東部に世界最高のエベレスト山（標高8848メートル）がある。エベレストは、チベット語で「チョモランマ」、ネパール語で「サガルマータ」と呼ばれる。

※「シェルパ」：ネパール東部の高地に住む民族の名前。ヒマラヤ登山隊の荷揚げや道案内として働く人が多い。